

「イパダダは——いるか？」

「はい——臭うッス！ 奴は、確かに……この上から、プンプン臭うッス！」

「よオオし——！」

都会の暗闇の片隅。『To The Top』の大音響に包まれた非常階段を、二人の男が駆け上がっていた。

「絶対逃がすな、トモスケ！ 関東オンバケの意地にかけても……今夜こそ、イパダダを捕える！」

「はいッ、サワモリさん！」

命じた男の横顔は、鋭く、精悍せいかんだった——まるで、獲物を追い詰める猟師のように。

応えた若者は、いつの間にか、両手足を用いて、鉄の階段を駆け上がっていた——まるで、猟師に仕える忠実な猟犬のように。

速い。速い。闇に包まれた急な非常階段を、音もなく駆け上るその速度は、既に、人間ヒトとしてものではない——。

「！ いた——いました！ サワモリさあん!!」

「応ッ!!」

ビルの屋上——換気装置と配管機器の間に、「それ」はいた。

長く伸びた髪を振り乱しながら、パラボラアンテナの陰に蹲うすくまっている、「そいつ」。

「そいつ」の足元には、作業服を着た男性の身体が力なく横たわっており……その首は、「そいつ」の手に掴つかまれたまま、不自然な方向にぐにやりと振ねじ曲がっていた。

「……イパダダ……」

低く呟つぶやきながら、「猟師サワモリ」は見た——犠牲者の鼻孔から立ち昇る、白い霊気を。闇の中に蹲る「そいつ」は、白い魂を引き出し喰らいながら——乱れた髪の下、にしやり、と笑んだ——。

もつとくれオレだけに お前の愛を

もつとくれオレだけに お前の愛を

「トモスケ。奴は、これで……」

「……八魂ッす、サワモリさ——」

トモスケが答えきるよりも早く、サワモリの足が地を蹴けった。

破壊音——。

超人的な蹴りを受けて、振ねれ仰のけ反った。パラボラの陰にはもう、「イパダダい」はいない——イパダダは換気装置の上から、最後の一滴を啜すり扱とった犠牲者を放り出しながら——無表情な瞳で、サワモリを見下ろした。

闇の音が 妖しく誘う  
微笑み囁く 相手になるぜ

換気装置上に陣取った、イパダダの口から、鼻から。今し方摂り込んだのと同質の白い霊体がズルズルと溢れ出す——咄嗟に身構えながらサワモリが叫ぶ。

「！魂式がくるぞ、トモスケ——！」

乳白色の霊体が、床に蟠り、分裂しながら、仮初めの「形」を成していく。平べったい胴体に、三対の棘肢。長い触角を額に震わせた、憤怒の形相——ゴキブリ魂式。生白い、人面の巨大ゴキブリの群れが、刃物のような翅を拡げて、二人に襲い掛かる——。

「ひ、ひ、ヒひえええええッ！」

白い魔虫の群れに集られて、トモスケは犬のような悲鳴を上げた。

手首ほどもある太さの節足に生えた鋭い棘が、二人の衣服を、肌を容赦なく引き裂き、倒れた身体に押し掛かる。幾本もの触角が、争い合うようにのたうつ下。底知れぬ敵意に凝り固まったような白い人面が、歯を剥き出して、首筋に喰らいつこうとする……。

その刹那、ゴキブリ魂式の群れは、巨大な力で振り払われた。周囲に叩きつけられた魔虫の幾匹かが、悲鳴とともに白い霧に還る——。

「……………」

漂う霊気の中、二人の男が立ち上がる——いや、その姿は既に、「二人」ではなかった。

黒衣にぶらさがった棘肢を耖り捨てるサワモリの顔は——赤く、硬く、滑らかに光る、異形の象徴と化していた。強靱な甲殻類を連想させる、異形の象徴に——。

トモスケの頭部もまた、象徴に変わっていた。栗色の毛並の中から突き出された赤い舌が、ハアハアと荒い息を吐いている——。

「二人」ではない。人間ではない。それはいわば、「生きている象徴」。

「甲殻類」。そして「犬」が、人の形をとって転生した存在。そう、それは……。

「いくぞ、トモスケ！」——オンバケサワモリが、命じた。

「はいッ、サワモリさん！」——オンバケトモスケが、応えとともに、魔虫の大群へと跳躍した。一斉に飛びついてくる人面ゴキブリの群れを殴り付け、踏み付け、叩き潰す。

「た……魂式は、引き受けたッス！ サワモリさんは、奴を……イパダダを!!」

「——応ッ!!」

サワモリが、黒い旋風と化して、魂式の背後に身構えていたイパダダに躍りかかる。唸りをあげる剛脚がパラボラを薙ぎ倒し、換気装置を鉄拳が貫く。長い白髪を振り乱してイパダダが仰け反り、打撃の間をすり抜けながら、ふらつくように暗闇を後ずさる——。

闇の声が　妖しく誘う  
微笑み囁く　相手になるぜ

——追いつめた。SHIBUYAの夜景をバックに、ビル屋上の縁に蹲ったイパダダの前に、サワモリは慎重に身構えた。

「……………」  
何かを祈るかのように構えた手刀が、次第に蒼い靈氣あおを帯び始める。……そう、それは、戦いでもあり、祈りでもある。邪悪な存在を滅すべき靈力を蓄えた、封滅の手刀——。

雨の音に　街が泣いても

雨の音に音に　街が泣いても泣いても

傘があればいい　泣くだけムダさ

あればあればいい　泣くだけムダさムダさ……

……胎児のように身を丸めたまま、地鳴りのように反響する「その歌」に包まれながら——イパダダは、自分に迫る敵を平然と見つめ返した。

蒼く燃える手刀を構えながら、サワモリがジリ、と間合いを詰めて——。

「ハッ!!」

サワモリが、危険な間合いを跳躍する。蒼い手刀が、イパダダの身体に届こうとした、その刹那——。

イパダダは身を反らしながら、サワモリの手刀を受け止め、引き寄せて——そのまま、虚空に落下した——。

ムダさムダさムダさムダさムダムダムダムダ………!

「——サ、サワモリさああん!!——」

「——!!——」

祈り　掟　誓いを　捨てるのさ　Leave it to chance

きつと聴くオレだけが　勝者のメロディ

纏れ合うようにして落下する、耳元に渦巻く風の音。視野の中、急速に拡大してくる、人気のない裏通りの大俯瞰……無限に思えるダイブの最中、骨のように白い、イパダダの無表情を間近に見つめながら——サワモリはその歌を、聴いた。

きつと聴く オレだけが 勝者のメロディ……

不気味なまでに変調し、捻じ曲げられてはいたが——それはやはり、あの歌だった。……六十五年前の夏、命をかけて求め、守ろうとした——懐かしい、あの歌。裏通りに輝くマンホールの蓋が、ぐんぐんと迫ってくるのを感じながら。無残に傷つけられたあの歌を耳に響かせながら。サワモリはふと、その名を呟いていた——。

「……かなで……」

——きつと聴くオレだけが——

その瞬間。落下する身体が何かに掴まれ、力強く引き上げられる。空中で制動をかけられる、その一瞬を狙っていたかのように、イパダダの身体がサワモリから分離する。——猫のように身を翻しながら、白い長身がマンホールの上に降り立ち、そのまま裏通りを駆け去っていく……。

「……」  
両肩を掴まれた頭上に、静かな羽ばたき音を聴きながら——屋上に運ばれたサワモリに向かい、「犬」が駆け寄ってきた——。

「……ああ、サワモリさん——！ 俺は……俺は、もう……」

「危ないところでした……間に合って良かったです、サワモリさん」

「……」

サワモリを救った「鷹の象徴」は、巨大な羽を畳むと同時に、若い女の顔に戻った。大きく身震いした「犬」が、トモスケの泣顔に変わる。

「サワモリさん。俺は……良かったツス。本当に良かったツス、サワモリさん……」

「ああ……」

——「甲殻類の象徴」は、低く呟くと共に、精悍な男の顔に還ったが、その表情に、死地を脱した喜びはなく——ただ、沈鬱な苦渋だけが刻まれていた——。

「……逃がした、か……」

「……」

「鷹」が——ハシタカが、力なく頷く。

「八魂のイパダダが——この街に……」

「……」

「サワモリさん……」

険しい瞳で、眼下に広がる絢爛たる夜景を見下ろすサワモリの背後。唇を噛み締めながら、「犬」が——トモスケが、呟いた。

「もう、こうなったら……奴を鎮めるには、『ブジンサマ』にでもお願いしないと……」

「……………」

サワモリの心中を代弁するかのように、ハシタカが短い溜息をついた。

『ブジンサマ』って——それは伝説のお話でしょ。昔々の御伽噺。……そんなもの当てにしてどうするのよ、トモスケ」

「……それは、そうですけど……」

ハシタカに窘められても、トモスケは、その思いを諦めきれないようだった。もじやもじやの頭を抱えるようにして、未練ありげに呟く。

「でも……せめて、『いのりうた』があればなあ……」

「トモスケ——!」

鋭い声に鼻面を叩かれて、トモスケは首を竦めた。ハシタカは、苛立たしげに言い募る。

「それはダメ。『歌姫』が——カノンちゃんがどういう状態だか、あんたもよく知ってるでしょう? ……あの娘に無理強いするようなことは止めとこう、『いのりうた』を取り戻すまで、ゆっくり待ってあげよう——そう、皆で決めたばかりでしょ?」

「分かっているけど……でもなあ……」

「……………」

二人のやりとりを背中で聞くサワモリの耳を、あのフレーズが再び貫いた。——懐かしいメロディを覆う、歪んだ詞。……「いのりうた」であって「いのりうた」ではない。それは、偽りの、盗まれた「いのりうた」……。

雨の音に 街が泣いても

傘があればいい 泣くだけ無駄さ

一人俺のステージ 手に入れる In a moment

もっと上の世界へ ノロマは Leave behind ……

「分かっているけど……さっきの戦いだって、『いのりうた』があれば、もっとやれたと思うんだ。偽物なんかじゃない、本物の『いのりうた』が支えてくれれば、もっともっと力が湧いて、頑張れて、あんなイパダダだって——そう思うっしょ、ハーさん?」

「それは……」

「——『いのりうた』、か……」

夜景を見下ろしながら、サワモリが呟く。

『いのりうた』があれば……だが、それはない。『歌姫』が心を取り戻さない以上、本物の『いのりうた』は、どこにもない……」

「サワモリさん……」

「俺達は、オンバケだ。人間を護り、イパダダと戦うオンバケだ。……『いのりうた』があるとなかろうと、俺達は……俺達オンバケは……」

「……………」

きつと聴くオレだけが 勝者のメロディ

きつと聴くオレだけが 勝者のメロディ

TOKYO、SHIBUYA。煌々たる照明の渦に、夜闇を奪われた不夜の街……その虚空に、冒涇の歌声が、飽くことなく響きし続けるのを聴きながら——サワモリは、夜の街に向けて、低く呟いた。

「俺達は……当然のことを、するまでだ——」